

時間

根来滯子

40日という時間は、長いのか、短いというべきか、子どもの夏休みに匹敵するこの時間は、若いころは、全く、意に介しない時間であった。真夏の、暑さに悲鳴を上げる酷暑の40日、そして、真冬、酷寒の最悪の日々も40日という時間に、ほぼ凝縮される。40日―若いころは、それは、来年も、その次も続く平坦な日常の時間の一連に過ぎなかった。

現在、90歳を間近にひかえた私にとって、40日という時間は、やがて消える小雪が、一瞬、日光に照らされてきらめくように、やさしく手のひらに掬えることさえできない、はかない、それ故にとても貴重な時間なのだ。私は、初冬の季節に、総合病院の整形外科病棟と、リハビリ病棟で40日間、入院生活を送った。

10年前、70代の後半であったが、私は「変形性股関節症」という関節の病気で、同病院で手術を受けた。

「変形性膝関節症」と同じ、大腿骨を支えている軟骨がすり減って痛みが出て、やがて歩行困難になるので、人工関節を埋め込んで置きかえるという手術である。かかりつけの整形外科で、手術を勧められていたのだ。

手術名は、「人工股関節置換術」である。レントゲンで見ると、人工関節の大きさに驚くのだが、手術の後、2、3日でリハビリが始まり、3週間もすれば痛みもとれ、普通に歩ける様になるという驚くほどの効果のある手術である。10年前、私は右股関節でこの手術を受けることよって、健康な脚を取り戻し、手術したことさえ忘れるほど酷使し、健全な生活を送ってきた。それが、丁度10年後になって、反対側の左の股関節が痛み出したのである。80代も後半になって手術は無理ではないかと反対する知人も多かったし、痛みは冥土の土産にもつていったらどうかなどと、尤もらしく意見をする友人もいたが、放置すれば、数えるほどの余命であるとしても、家事の苦手な私が家に閉じこもって悶々とするのは目に見えていた。

私は街中の喧噪が好きだったし、自分の作った食事よりも、小さなレストランでランチをとり、コーヒーを飲むのが楽しみだったので、手術に踏み切る決断は

固かった。整形外科病棟は、手術後は、リハビリで退院を待っただけの明るい病室である。10年前の入院のとき、6人部屋の病室で過ごした私は、同病の友人たちと大変仲良しになり、いつも夕食後は話題に花が咲いた。社会のこと、政治のこと、家庭のこと、愚痴に始まって、政治批判に至るまで、話題は尽きず、退院するのが寂しいほどの入院生活であった。

その日々がすっかり記憶に残っていて、10年間、半年に一度の検診を欠かしたことがなかった。

病院で手術にむけての検査が始まる。何よりも、ネックとなる糖尿病がないのが幸いであった。高齢ではあるが何とか諸々の検査をクリアすることができた。

長期入院が予想されるので、一人暮らしであれば留守にするあいだの雑事がのしかかってくる。新聞を止める、牛乳、ヨーグルト、サプリメント、化粧品等々の一時停止の手続き、両隣への挨拶、地域猫をかわいがっているのを、愛猫家の仲間への挨拶、これは最もくるしかった。地域猫、グレイに対する私の愛情は並々ならぬものがある。私が留守の間、グレイは、エサはもらえるかもしれないが、冬の寒さが気にならない寝床を提供してもえるだろうか。後ろ髪をひかれる思い

で病院にむかった。入院生活の間、私の気がかりはグレイのことが大半をしめた。グレイは元気か、寒くはないか、私がいなくてさびしがってはいないか、隣人に電話をしたとき、鳴きながらわが家の周りを歩きまわっていると聞いたとき、しゃくりあげるものがあつた。

病室は4人部屋、一室に、カーテンで仕切っているとはいえ、4つのベッドが並んでいる。俳人正岡子規は、エッセイ句集『病床六尺』の中で、「病床六尺、これがわが世界である。しかもこの六尺の寝床は余には広すぎるのである」といつているが、私の世界はベッドとテレビ、小机、ロッカーがすべてである。ベッドの周りをうろろろするには、2、30歩もあれば十分である。

術後5日目に、整形外科病棟から、リハビリ病棟に回された。高齢者の一人暮らしなので、十分に自立できるまで入院させてほしいと、身元保証人の娘が主治医にお願いをして長期リハビリのために専門病棟に移ったのである。

病人にとって、介護者が優しいということは何物にも代えがたい特效薬である。

「リハビリ理学療法士」という肩書を持つ彼らは比較的若い男性が多いのだが、彼らの患者に対する態度は、ほんとうに親身で、資格を取るための教育の一環かもしれないが、私自身も彼らの暖かい態度に感動したほどである。相手を信頼してこそリハビリの効果も上がるといふべきだろう。一人一人に専属の療法士が付くのだが、私の専属になった彼は、若いだけにとても熱心で、私も、勿論早く元気になりたいという欲求から彼の期待に応じようと努力し、効果は抜群であった。

私は年齢の割に身体機能がよいと看護師に驚かれるほどであった。長年の社交ダンスで培われた能力だと思ふ。車いすから歩行器、杖での歩行と進歩していくのがうれしかった。リハビリ専門病棟の4人部屋で私は35日間、入院生活を送った。テレビ観賞が唯一の気を紛らわす手段である。閑な時間を有効に活用して俳句を勉強しようと、その類の参考資料を若干、持参したが、徒勞であった。時間はあれども集中できずということを知った。

若干の個人差はあるが、志をもって看護師という職業を選んだ彼女たちの献身的な奉仕の精神は賞賛に値する。看護学校でその様な教育を受けているのだろうか

が、本人の強い意思がなければできない職業である。患者の苦痛は夜が多いようだ。真夜中のよびだしにも、黙々と応じて、寄り添ってくれる優しさに心を打たれた。

整形にまつわる手術をしたというわけではなく脳梗塞、心筋梗塞、怪我など、様々な理由でリハビリを与儀なくされている人たちが、圧倒的に多いのがこの病棟の特徴である。いつ完治するか予測の難しい病人の苦しみを目の当たりに見るようになった。

入院するとき、近所のかかりつけ医から、高齢者は長期にベッドで寝ている生活をしていると、手術は成功しても、歩けなくなる事が多いから、しっかりとリハビリをし、出来るだけベッドから離れるようにというアドバイスを受けていたので、体力を付ける為に、病棟の中を歩き回るようにした。コロナ禍で、階を移動することは禁止されていたので、ナースステーションの間を、スマホで歩数を測りながら2000歩を目指して毎日、歩き回った。

痛みがなくなれば、入院生活は単調である。朝晩の看護師の問診、熱と血圧を測り、後はひたすらリハビリに励むのみ、何度でもくりかえすが、リハビリ療法

士は患者の我がままで腹の立つことも多いと思うのだが、自分の感情を押し殺して、患者の側にたつ。見事なほどである。私も優秀なりハビリスに恵まれ、歩行が順調に進歩していった。

2023年の元旦を病院で迎えた。連日、晴天に恵まれていたが、元日も、5階の病棟の東廊下の大きな窓から初日の出を向かえることができた。



2023年1月半ば、40日の入院生活を終えて退院した。私に残された時間は知ることができない。体

力がなかったので、長距離を歩くことはできないが、もう股関節の痛みはない。痛みのない脚で歩くことの爽快さは、思わず込み上げる微笑みを伴う。一年以上、股関節をかばった歩き方しかできなかった身体のゆがみを治し、満開のさくらの下を歩きたい。5月の薔薇園、6月のあじさい寺、夏、ひまわりの群集、コスモス畑、そして金色に輝く紅葉、私は雑踏も好きだ。ネオンがきらめく繁華街が好きだ。未知の街をさまよい、あまり人気のないレトロな喫茶店でコーヒーを飲み、アットホームなレストランで一人、食事をするのが好きだ。どこまで私の時間はあるのか、悠久の時間は優しく私の上にも流れる。

同室で隣のベッドだった若い知人はファッションに詳しく、高齢になったら、明るい色彩のドレスを着ること、暗い色は、更に老けた印象を与えるので避けること、というアドバイスを頂いた。帰宅して、さっそく近所のブティックで、さくら色のセーターと、カーディガンを買った。着なれない色だが、新しい出発にはふさわしい色だ。私はいま、豊穡の春へと漕ぎいだす。目に触れるものみな美しく、天井裏を駆け回るネズミさえ私を励ましてくれている。

先日、市の高齢者支援センターの女性職員が訪問してくれて、万一、外出先で倒れ、緊急を要する場合は通報先にと、電話番号をかけた札状のものを持参してくれた。バッグなどに取り付けておくようというありがたい計らいである。登録のために写真をとらせてほしいといってスマホを取り出した。もちろん快く承諾して写してもらった。感謝を込めて微笑んだつもりであった。彼女はスマホに写っている私の姿を、

「よく写っていますよ」といつてみせてくれた。そこには漫画『日本昔話』にでてくる、背中の丸い典型的なおばあさんの顔があった。「これが私？」まさしくそれは私の実像であった。

老いの道に 咲く華ありや 春爛漫

(2023年 3月)